

津山高専
第43号

図書館報



津山工業高等専門学校

もくじ

新図書館 特集号

先生お薦めの本	3
新図書館	7
ビブリオバトル・交流会	10
校内読書感想文優秀作品	11
図書委員活動報告	13
図書館データ集	15

ハイデガーのベンチ、あるいは「本の世界」

図書館長 稲田知己



20世紀最大の思想家と評されるハイデガーは、ドイツ南西の田舎町メスキルヒの出身である。この地のお城の庭園をぬけて「野の道」を歩く。山は見えない。麦畑やトウモロコシ畑が連綿と続く。道沿いのところどころに十字架がまつてある。30分くらい歩くと、道は森の端を抜けていく。その森のひととき大きな広葉樹のしたに、それはあった。「ハイデガーのベンチ」だ。

このベンチのうえで修学時代のハイデガーは書物をひもとき、やがて思想家になることを決意した。いやそればかりではない。哲学者として一家をなしてからも、彼はこのベンチにたびたび立ち戻った。このベンチから見える世界はハイデガー哲学の原風景なのである。ここに座って何が見えるだろうか。

畑、畑、また畑、そして空。さえぎるものは何もなく、くっきりと地平線が遠望できる。はるかな地平線にすいこまれるように眺め入っていると、さまざまな可能性を秘めた世界、いわば「本の世界」を象徴しているようにも思われてくる。少年ハイデガーが読書した故郷のベンチは、これから彼が踏み入る豊穡の思想的世界をたしかに告げていた。



— CONTENTS —

先生お薦めの本	3
新図書館	7
ビブリオバトル・交流会	10
校内読書感想文優秀作品	11
図書委員活動報告	13
図書館データ集	15

先生お薦めの本

先生から学生へのお薦めの本を紹介します

一般科目 前澤 孝信

石田雄太『桑田真澄 ピッチャーズ バイブル』
(集英社文庫)

4月に高専に赴任し、自分の身にふりかかった大きな変化の1つは、野球部の指導教員になったことです。野球は中学で挫折したので、指導するには圧倒的に知識が不足しており、どのような練習が重要なのか分かりません。そこで本書を手に取りました。この本は要約すると「考えて野球する必要性」を訴えています。桑田真澄は元巨人のエースで、高校時代PL学園で甲子園優勝2回、準優勝2回という輝かしい成績をおさめています。高校時代には打者としても甲子園でホームランを放つなど好成績を残していますが、驚くべきことに、バッティング練習は1日数十回の素振りだけだったそうです。ピッチング練習が忙しく、バッティングに時間が取れない。そんな中、考えて素振りすることで結果を残しました。このエピソードは「練習は量より質」、さらに、「練習メニューより練習に取り組む姿勢が重要」だということを教えてくれます。「量より質」が大事ということはスポーツ以外にも当てはまると思います。本書の中には、ここで紹介した以外にも桑田がいかに考えて野球に取り組んできたのかを表すエピソードが詰まっています。一流選手の姿勢を学ぶことは、スポーツに限らず、皆さんがレベルアップするために大いに役立つと思います。ぜひ読んで頂きたい1冊です。

一般科目 山口 裕美

ジョージ・オーウェル『動物農場』(角川文庫)

研究対象が文学作品であることが多い私の読書では、「世の中の捉え方」に影響を及ぼすものが琴線に触れることがあります。ここで紹介する作品は、一言では割りきれない複雑さをもって、読者の思考を試すようなものかもしれません。

舞台はとある農場、登場人物は農場の動物たち、対する敵役は農場経営者である人間。当初は、自由を求めた動物たちが農場に反旗を翻し、つかの間の自由を手にする。エデンやユートピア、このような場所を人工的に作り出そうとすれば、何が起こるのだろうか。平等な動物の世界、ユートピアの到来かと思われたが、社会には必ず権力が登場する。その権力が維持されるべく、正しいとされた情報は次第に某かの思惑によって書き換わり、大衆である多くの動物たちはその思惑に飲み込まれてゆく。最初に示された戒律は喪失し、最終的に真逆の戒律が登場する。そして、最大の敵と目していたものと自由の旗手であったはずのものと、その差異は混ざり合ってしまう。自由は、新たに権力を手にした者によって搾取される。人工的樂園という管理社会では、情報が制限され思考力は奪われてゆく。記憶は徐々に改ざんされ歴史は塗りかえられる。

不条理な世の中を観察するためのヒントがみられるので、「世の中の捉え方」が少し変わってくるかもしれません。

機械工学科 加藤 学

(編) 日本機械学会 (著) 石綿良三・根本光正
『流れのふしぎ—遊んでわかる流体力学のABC—』

(講談社 (ブルーバックス))

みなさんは、身近にある物理現象を理論的にきちんと説明できますか？例えば、「お茶を飲む際に、茶葉はなぜ中央底に集まるのでしょうか？」「変化する球はなぜ曲がるのでしょうか？」普段は意識をしていないかもしれませんが、みなさんが勉強している数学、物理をはじめ各専門科目は日頃目にする物理現象を理解する基盤になっています。

本書は、機械工学で基礎となる四力学の一つである流体力学に関するものであり、流体力学の理論と実際の現象とを結びつけてくれる内容になっています。「じゃあ、自分たちには関係ない…」と電気電子と情報の学生は思うかもしれませんが。いえいえ大丈夫です。流体力学は、物理学を水や空気用に拡張したものですので、流体工学を勉強していない学生でも、本書は高専生であればみなさん楽しめる内容です。もちろん、流体工学を勉強した(している)機械工学科、電子制御工学科の4・5年生にとってはさらに楽しめると思います。

本書では、流体力学の分野における身近な物理現象について「簡単な実験」「応用例」「タネあかし」というように構成されています。数式は登場しませんが「なぜそうなるか…？」を考えながら読み進めることができます。冒頭に挙げた二つの例以外で面白い事例として「飛行機の飛ぶ原理」「霧吹き of 原理」があります。この二つに共通する点は、テレビ、書籍、インターネットにおいてベルヌーイの定理を誤用した説明が見られる点です。本書ではこれに対して明快な解説がなされています。自分で考えてみることで、疑問を持つことの大切さを気づかされます。

自然科学の魅力を再発見できる一冊ですので、全学生にオススメです。

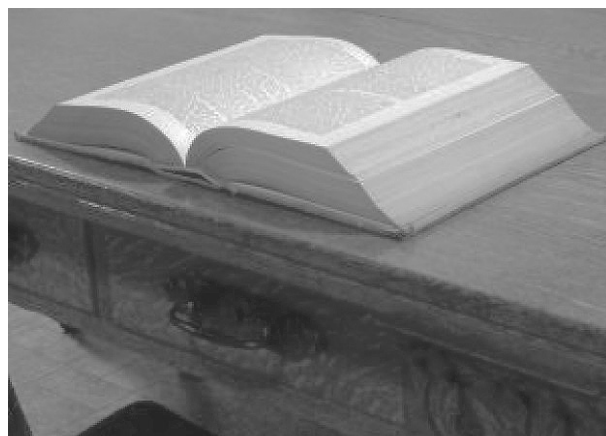
電気電子工学科 香取 重尊

新田次郎 『剣岳一点の記』 (文芸春秋)

数年前に読んだ本のため、記憶を遡りながら書いています。映画化され話題にもなりましたが、興味のある方は実際に読まれることをお勧めしたい。

登山が趣味として普及する以前の実話に基づく話です。明治39年、参謀本部陸地測量部の測量官・柴崎芳太郎に未踏峰とされてきた北アルプスの『剣岳』への登頂と測量の命令が下されることから、物語は始まります。『剣岳』という山は近代的な装備をもってしても、毎年事故のニュースが後を絶ちません。歴史的には弘法大師が千足の草履(三千足または六千足ともいう)を費やしても登頂できなかった、という伝説があるそうです。8000m級の山々まで登りつくされている現代で、3000m程度の日本国内の山がなぜ？という疑問が生じます。登山の技術的なことは良くわかりませんが、五感を最大限に使って、感じ、考え得ることを尽くしての挑戦は、自然と向き合うことの緊張感を感じさせるものでした。

さて、なぜこの書籍を取り上げたかという点、自然を深く観察し、理解しなければ達成できないというスタンスは工学そのものです。原子や分子、電気も目で見ることができません。五感を最大限に使ってアプローチし、達成したときの喜びは一人です。ただ、予期せぬことで先を越されることもあります。



電子制御工学科 桶 真一郎

ヨーゼフ・マルティン・パウアー

『我が足を信じて』（文芸社）

海外旅行の経験のある学生は、どれくらいいるだろうか。近年は語学研修やホームステイなど、学校を通して海外へ行く機会もあるし、上級生になると学会発表で海外に行くこともある。また、家族旅行で海外へ行くことも珍しくない。この本の主人公クレメンス・ファレルも海外を旅した。しかし、彼が成し遂げたのは、単なる海外旅行ではない。

ファレルは、第二次世界大戦の捕虜として連れてこられたソビエト極東のデジョニフ岬にある強制収容所から、単独で脱出した。極寒のシベリアの森の中を徒歩で逃げたのだ。見つかったら命はないから、列車などを利用することはできない。街に立ち寄って買い物をすることもできない。必要な物があれば盗み、南、そして西へと逃げた。何度も追手に見つかりそうになったり、ならず者に殺されそうになったりしながらも、ひたすら進んだのだ。収容所のあるユーラシア大陸の東端から、保護されたイランまで。

結末を明かすことは、いわゆるネタバレにはならないと思う。なぜなら、それを知ったうえで読んだとしても、次々と遭遇する困難に、生還することなどできるはずがない、と思うに違いないから。それほど過酷な状況を生き抜いたのだ。彼の生きる力と強い意志には圧倒された。また、サン・テグジュペリの「人間の土地」中の、アンデス山中から生還したアンリ・ギヨメの言葉を思い出した。

「ぼくは断言する。ぼくのしたことは、どんな動物もなし得なかったはずだ」

ファレルにも、この言葉を語る資格は十分にある。

ところで、僕は昨年この本を持って海外にでか

けた。分厚い本なので重かったが、持って行ってよかった。旅行先ではいつも夜遅くまで飲み歩きのだが、この本を読みたいばかりに、早くホテルに帰った。おかげで、危険な目にあわなくて済んだ。帰りの飛行機が飛ばず空港で足止めされたときも、待ち時間が苦にならなかった。関空への到着が遅れ、岡山に戻れず大阪で一泊する羽目になったが、退屈することはなかった。みなさんも、海外旅行のお供に、ぜひどうぞ！

情報工学科 藪木 登

鎌田 洋

『ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと』

(ソフトバンククリエイティブ)

この本は、ディズニーランドをテーマに出版されたシリーズの一つで、ディズニーランドで働くカストーディアル（清掃員）の話です。清掃員と言うものの、ディズニーランドではエンターテイナーとしてたくさんの人に夢を与え、最も人気のある仕事だそうです。この仕事を行った「そうじの神様」と称えられた人が、チャック・ボヤージンと言われる方で、ディズニーランドの創始者ウォルト・ディズニーがこよなく信頼を寄せていた人物でもあります。この「そうじの神様」にいろいろ教えてもらった著者が体験に基づいて書き下ろした物語がこの本です。

本文は、4つの物語で構成されています。第1話は、ナイトカストーディアルの仕事をしている父と娘の話です。第2話は、行動ある管理者と従業員の関係の話です。第3話は、カストーディアルにあこがれて入社した娘とその母の感情の変化についての話です。第4話は、著者の夢とそうじの神様チャックがなぜ掃除をしなければいけないかを論じてくれています。

ディズニーランドを訪れた人も、そうでない人

も、園内の様子が目に浮かんで来ると思います。各話題は非常にシンプルで、読みやすく、また、考えさせられ、なおかつ心温まるものです。

この本の中で、書かれている次の二つの言葉は、皆さんに持っていて欲しいと思います。必ず、今後の人生に役に立つでしょう。

- 夢は、あきらめなければ叶う。
- 何に対しても限界を決めずに取り組み、ダメだと思っても、信じる心を共有することで限界を越える時がある。

最後に、読むことについて、時間はそう取られないし、気楽に読めるので、一度読んでみて下さい。

一般科目 杉山 明

夏目漱石 『三四郎』

「それから」「門」に続く、漱石の前期三部作の初作である。熊本から東京に出てきた小川三四郎が、多くの人々に出会い、戸惑い、悩みながら成長していく過程を描いた、今風に言えば青春小説。学生諸君も年齢が等しいので、同感できる部分も多いのではないだろうか。

私が「三四郎」が好きなのは、何と言っても作品の持つ「明るさ」に理由がある。続編の「それから」を最高傑作に推す声も多いが、「それから」は主人公の年齢が高くなったせいか、その分、作品に「重さ」のようなものが感じられる。「門」に至ってはストーリー展開に無理があり、もはや失敗作と言っても良いのではないか（大文豪に対してこんなことを言っても良いのかなと、自分でもちょっと怖い気がします）。その点「三四郎」は、失恋や失敗を経ながらも前に進んでいく主人公の若々しさが、読者（つまり私）をして幸福な気持ちにさせる。

今「大文豪」ということばを使ったが、夏目漱石が日本を代表するナンバーワン作家であること

は論を待たない。唐突な話したが、外国人と話をしていると感じることのひとつに、彼等は自国の大作家を尊敬し、その作品をよく読んでいるということがある。イギリス人ならシェイクスピア、アメリカ人ならヘミングウェイ、中国人なら魯迅。それは国を愛し、誇りを持つということでもあるのだろう。その点、漱石を語れる日本人がそれほど多くないのは寂しい。

日本の国際化が叫ばれて久しい。外国のことを理解するのもたいせつだが、自国をよく理解することも国際化だ。そのためにもみなさん、もう一度漱石を読んでみませんか。

一般科目 横谷正明

原作：久住昌之×作画：谷口ジロー

『孤独のグルメ』（扶桑社文庫）

輸入雑貨を扱っている主人公の井之頭五郎が、営業で様々な町を訪れます。その町の食堂で、食事をする様子を描いたマンガです。題名通りグルメの話なのですが、高級料理やうんちくが出てくるわけではなく、主人公の食べるものは、下町の大衆食堂の安くておいしいものばかりです。主人公が心のなかで思ったこと、感じたことを中心に話が展開していきます。このマンガを読むと、学生のときや独身のときに、ひとり安い食堂に食事に行ったりしたことなどが思い出されます。また出張のときに、井之頭五郎の気分で安くておいしそうな店を見つけて入るのが、ひとつの楽しみになりました。



図書館リニューアル・オープン

総合情報センター・図書館棟は、平成25年度に改修工事が行われました。4月～11月中旬の間、仮図書館として一部の資料のみの利用でしたが、11月20日に、ついに図書館がリニューアル・オープンしました。

改修前の図書館の場所は2階でしたが、リニューアル・オープン後は1階に移りました。

開放的な空間を実現するとともに、新たにグループで学習・研究するための部屋や、移動式の集密書架を設置しました。(図書館内の詳細については、8～9ページをご覧ください。)

蔵書は約7万冊あり、特に理工系の資料が充実していますが、教員の推薦図書や、学生希望図書、ブックハンティングで選ばれた図書の購入により、人文・社会科学や、小説などもバランスよく所蔵しています。新聞も10紙、継続して受入している雑誌も19誌あります。

開館時間は平日が8:30～21:00(休業期間は17:00閉館)、土曜日は13:00～17:00(休業期間は休館)、定期試験の直前と試験期間中の土・日曜日及び国民の祝日は、13:00～21:00です。

新しくなった図書館をぜひご利用ください。



【 図書館入口 】

明るく開放的な空間になっています。入口付近に開館時間や入館の際の注意事項が掲示してあります。



本の無断持ち出しをすると、ブザーが鳴ります。本を借りる時は、必ずカウンターで貸出の手続きをしてください。

【 カウンター 】

図書や雑誌の貸出や返却などを行います。気づいたこと、分からないことがあれば、気軽に声をかけてください。予約した津山市立図書館の本の受け取りや、返却もできます。



【 ミーティングルーム 】

図書館に入ってすぐの所にミーティングルームが2部屋できました。グループでの学習や研究にぜひ使ってください。



利用できるのは本校の学生・教職員で、時間は1回2時間までです。他に利用したい人がいなければ、延長もできます。事前予約もできます。

【 ブラウジングコーナー 】

新聞や雑誌、シラバス掲載図書、学科推薦、学生希望図書、就職・進学・資格関連図書などが置いてあります。



【 PCコーナー 】

パソコン17台とプリンタが1台あります。本校学生はレポートの作成や印刷などのために使用できます。

【 閲覧・学習スペース 】

静かに図書館の資料を読んだり、学習したりするためのスペースです。4人掛けの机が10台と、1人掛けの机が9台あります。奥には書架があり、理工系・人文社会科学系・語学・文学、参考図書など、たくさんの本が置いてあります。



中庭は窓を大きく取り、ウッドデッキを敷くことで、閲覧室が明るくなりました。

【 集密書庫 】

移動式の集密書架を新たに設置しました。以前の図書館の書庫にあった図書や雑誌のバックナンバーなどが置いてあります。



—第1回「ビブリオバトル」で優勝しました—

津山市立図書館主催第1回「ビブリオバトル」に参加しました。「ビブリオバトル」とは、参加者がそれぞれ好きな本を紹介して、一番読みたくなった本に投票しチャンプ本を決めるというものです。参加者は私を含め10人で、観覧の方も10人以上おられて、思っていたより多くの人の前で話すことに緊張しました。しかし会場は終始和やかなムードで、自分の思っていることをしっかり発表できたと思います。日頃初対面の人と本の感想を話す・聞くという機会は無いらしい、自分の感想について意見をもらうことも無いので非常にいい経験になりました。また自分の感想に共感してもらえるのはとても嬉しいことだ、と新しい発見もありました。今回が第1回だったということで、継続して開催してもらい、よりよいものになっていけばいいと思います。

私は伊坂幸太郎著の『終末のフール』という本を紹介しました。この本では、「8年後に小惑星が落ちてきて地球は壊滅的状况になる」と発表されてから5年後の人々の生活が描かれています。あと3年で終末を迎える地球と人間を通して、これまでとこれからの自分の生き方について考えさせられるものがあります。みなさんもぜひ読んでみてください。

(電子制御工学科2年 山本 桜)



—交流会に参加しました—



平成25年12月7日(土)に津山高等学校で、津山高等学校図書部、美作大学図書館ボランティア、津山工業高等専門学校図書委員の交流会が開催されました。15名が参加し、自己紹介、それぞれの活動報告、そして津山高校図書館見学が行われました。

また、3つの班に分かれて近代文学のクロスワードパズルを行い、図書館の本を手に取りながら、協力して答えを探しました。

来年度以降も同様の機会があれば、図書委員になった学生のみなさんはぜひ参加してみてください！！



校内読書感想文コンクール

一年生の読書感想文の中から図書委員が優秀作品を選出しました

第1位 『博士の愛した数式』 を読んで

1年2組（情報工学科） 松岡 里紗

いま、この本を読み終えた後だから思えることだが、『博士の愛した数式』はたくさんの人に読んでもらいたい。読み切った後のなんとも言えない穏やかさは、この本だからこそ得られるものだと思う。

『博士の愛した数式』という本の名前は以前から数学の先生方や友人から聞くことは多々あった。数学が不得手な私は、読んで理解しえない内容の本だと思い込み、自らこの本を読もうとしなかった。しかし、一人の友人が文庫本を渡しつつ、「読んでみたらいい。」と勧めてくれた。読むよりほかない状況で私はページをめくった。

まず、この本に登場する博士の記憶が、八十分しか持たないということに驚いた。八十分という一時間と二十分。それだけの時間のことしか覚えておけないというのだ。自分に置き換えてみた。もし自分が八十分しか記憶が持たないとしたら。きっと博士と同じように、体中にメモを貼りつけておくだろう。人ともあまり関わりたくなくなるだろう。その程度しか思いつかなかった。

そしてこの物語で私がなにより感動したのは、家政婦の「私」が博士にずっと付き添っていたことだった。八十分しか記憶が持たない博士は家政婦の「私」をすぐに忘れてしまっていた。家政婦の仕事というものもあったかもしれないが、仕事以上に付き添っていたように感じた。私はここでも自分に置き換えてみた。もし自分の近くの誰かが、八十分で私のことを忘れてしまうとしたら。家政婦の「私」のように、根気よく付き添えるだろうか。私にはできないだろう。私の曾祖母は百二歳まで生きていたが高齢のためか、私のことは一度も認識してもらえなかった。何度あっても私を見るのだが、私の母の名前を呼んでいた。曾祖母の中では、私の母が私くらいのときで、時間が止まっているのだと思った。そんな曾祖母を見るたびに疎外感を感じ、胸が苦しくなった。似たような思いをしながらでも付き添っていけるのだろうか。家政婦の「私」が博士の元に行くまでに、九人の家政婦がやめていた。やめた理由は様々だろうが、九人の家政婦の気持ちが少しわかる気がした。

物語の終盤に家政婦の「私」と博士の義姉との緊迫した場面がある。そこで博士はオイラーの等式が書かれたメモを残していく。私はなぜその数式が出てきたのか、読み終えた後もわからなかった。しかしこの本を読む機会を与えてくれた友人が、その数式の意味を教えてくれた。世界で最も美しいとされるオイラーの等式を変形させ、それを単純に読むと「愛に愛をかけると。いーっぱい愛情」となる。意味を理解したとき、自然と涙が滲んだ。『博士の愛した数式』を読んでよかったと心の底から思えた瞬間だった。

（小川洋子『博士の愛した数式』）

第2位 『キッチン』を読んで

1年3組（電子制御工学科） 寶官 花

私は吉本ばなな著、『キッチン』を読んだ。私はこの本を読んで、静かな本だ、と思った。これが私の最初の感想だ。そして私は考えた。死について、生きることについて、本当に楽しいことについてだ。この本は静かで、いろいろなことを考えてしまう本だった。

この本は死と生きることについて書かれている。主人公、桜井みかげのたった一人の家族だった祖母の死と、みかげを支えてくれた人の死について書かれている。みかげは、祖母が死んでしまい、家族がいない、つまり孤独になってしまう。私には家族がいて、みかげのように孤独ではない。家族や親戚が一人もおらず、孤独になってしまうことなんて考えたことはないし、考えたくもない。この本を読みながら、家族が一人もいなくなり孤独になったら、みかげのように心に穴が開いたようなあまり涙が出ない淋しくて悲しい気持ちになるのだろうか、と考えた。私はどのような気持ちになるのかわからないが、きっと悲しくて淋しくて泣いてしまうだろう。「涙があんまり出ない飽和した悲しみ」にはならないと思う。

この本の中で、ある日みかげが荷物整理のために、以前彼女が暮らしていた家に行く場面がある。この場面を読んで、私は亡くなった私の祖父を思い出した。この場面で、「しんと暗く、なにも息づいていない」「祖母が死んで、この家の時間も死んだ」とみかげは感じている。私もみかげと同じようなことを感じたことがある。それは祖母の家に行った時のことだ。祖母の家に行った時、祖父の部屋の前を通ることがある。祖父が亡くなってから部屋の前を通った時に、なんとなく部屋を見ると、そこだけ時間が止まったように感じた。電気がついて明るかった部屋は暗く、なんだか空気が重たく感じられ、何度も入った部屋なのに入ろうと思っても入ることができなかった。その時、祖父は死んでしまったと実感した。みかげもこの時の私と同じような気持ちになったのではないだろうか。なんだか怖いような、淋しい気持ちに。また、この本には「本当に楽しいこと」という言葉が出てくる。私は「本当に楽しいこと」とは自分にとって何なのかわからない。みかげが「彼女たちは幸せの中を生きている」と考えたように、私も幸せの中を生きているのだと思う。絶望というものを味わったことがないから、「本当に楽しいこと」がわからないのだと思う。絶望や苦しみを経験して、この本の登場人物のえり子さんのように、自分の人生を愛し楽しみ、「本当に楽しいこと」がわかるのではないだろうか。私はそういう人になりたい。

この本を読むまで、「死」についてそんなに深く考えたことはなかった。何度も苦しみは訪れるけれど、いつか「本当に楽しいこと」がわかる日が来る。この本を読んで、そう思った。

(吉本ばなな『キッチン』)

第3位 諸行無常

1年1組（情報工学科） 塚本 翔

「こら、罪人ども。この糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と大泥坊の韃陀多はまっ暗な血の池のそこにいる、何百、いや何千の罪人に対して叫びました。

その瞬間、私は天国から見ているお釈迦様、蜘蛛の糸にぶら下がっている犍陀多、地獄にいる罪人たち、これらの三方面からの気持ちを想像できました。

お釈迦様からすると、大泥坊である犍陀多を、救い出してやったのに自分ばかりが地獄からぬけ出そうと他人を蹴落とす、犍陀多の無慈悲な心に落ち込んでしまった、ということが分かります。

犍陀多は、つらく苦しい地獄の中で天からのびる糸を見つけ、これにすがってのぼってゆけば地獄からぬけ出し、天国まで行ける、と喜んでいるときに、大勢の罪人が糸につかまってきたので、このままでは細い糸がちぎれると思い、あのような発言をしたのでしょう。

罪人たちも、地獄からぬけ出したいので、糸にすがり、つかまったのだと思います。

この本を選んだ理由は色んな方面で読みとることができるからです。犍陀多があのような発言をしたのは、「僕でも救われたのだから、お前らもまてば糸が降りてくる。」や蜘蛛の糸をつかむ＝仏教の教えにすがると、というようないろいろな考え方ができるからです。

私は今まで生きてきて、テストの順位や、部活のスタメン争いなどで、人を蹴落としてまで自分の地位を確立しようとする人を多々みてきては「皆で助け合い、教えあい、集団としての本能ではないのか。」とずっと思ってきました。そして、そういった人に限って努力の大切さを分かっていないのです。自分のことだけを考えている人に努力なんてできません。

私は、そのような思いをてらしあわせながら本を読み進めました。

そして、犍陀多のあの発言の後、蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音を立てて断たれてしまうのです。これはお釈迦様が切ったのか、蜘蛛が切ったのかは分かりません。実は犍陀多は悪質なことを思わず、順番をまってくれと言いたかったのかもしれません。

その時の、何事にも動じない蓮をみて、諸行無常の念を思い起こさせられました。

原因があり結果があるということを身に焼きつけ、これからの人生、悔いを残すことなく生きていきたいと思います。

(芥川龍之介『蜘蛛の糸』)

図書委員活動報告

ブックハンティング班

夏休み前に紀伊國屋書店でブックハンティングを行いました。何が人気の本なのか、どのような本を入れると図書館を気軽に利用して貰えるかを考え行いました。その他にも、どのような本が求められているかをあらかじめサーチするために、アンケートを行い、効率よく選ぶことができました。



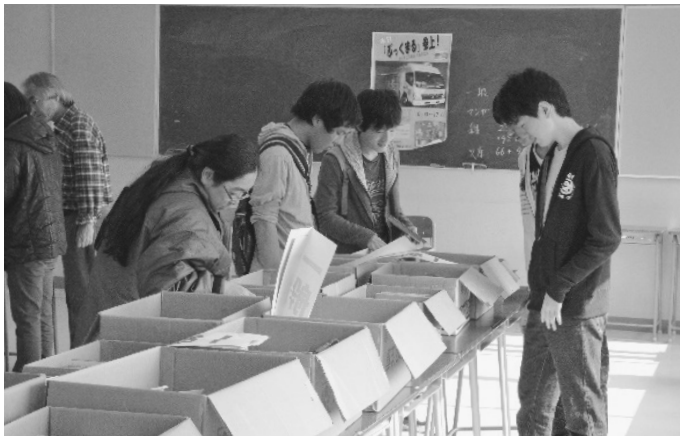
今回購入した中で人気が高かったのは宇宙兄弟です。皆さんもぜひ読んでみて下さい。今回ブックハンティングのメンバーが男子のみで学科も機械科が多く専門図書を選ぶ事が難しかったので、来年は図書委員だけでなく、ブックハンティングに参加したい学生を募りブックハンティングを実施するとともにニーズに応えることが出来ると思いました。

(機械工学科4年 平田 昌希)

弥生祭催し物関係班

弥生祭催し物関係では11月の3、4日に渡り古本市を行いました。今年は約1100冊の書物を津山市図書館さんから提供していただくことができました。昨年は経済や哲学関係のやや難しい内容の本が多かったと聞きましたが、今年は普通の本の他に様々なジャンルの雑誌なども多く入っており、年齢性別を問わず楽しめる古本市となっていました。1日目が雨だったこともあり、室内を訪れるお客さんも多く、今年は約400冊の本を持ち帰っていただけました。

(電子制御工学科4年 常安 岳)



図書館利用・読書奨励班

私たち図書館利用・読書奨励班は、図書館をより多くの人に利用してもらうことを目標に活動しています。その主な活動内容は、全学生に向けて読みたいと思う本や、おすすめする本を記入してもらう図書館アンケートの実施です。また、そのアンケート結果を元に、図書館の入り口付近の書棚に学生おすすめ本コーナーを設けました。更に、学生アンケートだけでなく各学科の先生を対象にして、授業や実験などで役立てることができる教材やおすすめする本のアンケートも実施し、同じように配置しています。第一学年から第五学年まで幅広く利用できるジャンルを取り揃えたので、ぜひご利用ください。

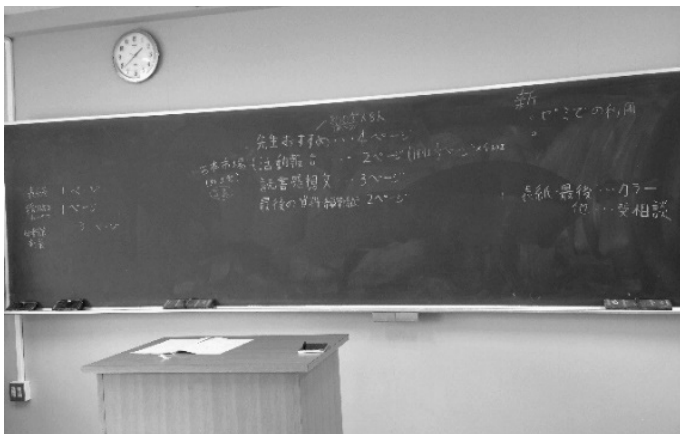
(情報工学科4年 藤井 美鈴)



図書館報班

私たち図書館報班は、6月以降何度もミーティングをおこないました。主な活動として、本館報に掲載する内容の項目や原稿執筆のお願いなど班員で担当を決めて、各所で打ち合わせをおこないながら、原稿を仕上げていきました。

先生方をお願いいたしましたお薦め本の紹介や、ほかの班の委員に協力を得て行いました1年生の読書感想文選定をはじめとして、執筆にご協力いただきました皆様に多大な時間を頂きましたことをこの場で御礼申し上げます。(電気電子工学科3年 神田 聖斗)



図書館講習会

平成25年度に津山高専図書館で行われた講習会を紹介します！！

新入生向けオリエンテーション

新入生を対象として、本の借り方・返し方など図書館の基本的な使い方を説明しました。
また、津山市立図書館の方にお越しいただき、津山市立図書館の本の借り方・返し方についても説明していただきました。

津山高専図書館の本を検索して探す

津山高専にある本を効率的に探す方法について、OPAC（蔵書検索システム）を使った検索の仕方、検索結果の見方を説明しました。

学 術 論 文 の 探 し 方

学術論文を探すための、電子ジャーナルやデータベースの使い方について、また、他機関からの学術論文の取り寄せについて説明しました。

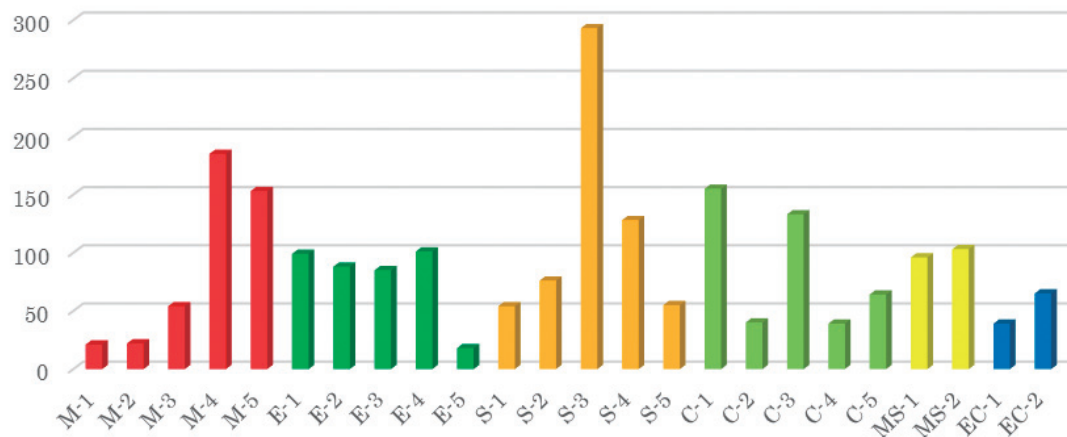
リポジトリダウンロードランキング 2013

津山工業高等専門学校学術成果リポジトリ (<http://repository.tsuyama-ct.ac.jp>) では、
津山工業高等専門学校の学術成果を保存・公開しています！！

	論 題	著者名	掲 載 誌	発行年	ダウンロード件数
1	水溶液中への酸素ガスの 溶解速度と溶解度	樋口敏三	津山工業高等専門学校紀要 34号 pp.41-48	1994	2415
2	万葉集巻五梅花の宴の歌について	梶田隆之	津山工業高等専門学校紀要 42号 pp.107-122	2001	1354
3	鉄定量分析の信頼性	長船忠夫 吉田 慎	津山工業高等専門学校紀要 3巻3号 pp.361-368	1974	823
4	炭素鋼の疲労強度と残留応力	戸井詔彦 山下鉄雄	津山工業高等専門学校紀要 14号 pp.89-94	1977	699
5	ボルト・ナットの 製図についての一考察	重松 清 牧 暢夫 里吉昭宣	津山工業高等専門学校紀要 23号 pp.103-106	1986	664

(期間：2013年1～12月)

貸出冊数 2013



M：機械工学科 E：電気電子工学科

(期間：2013年1～12月)

S：電子制御工学科 C：情報工学科

MS：機械・制御システム専攻

EC：電子・情報システム専攻

※数字は学年を表しています。

貸出ランキング 2013

順位	書 名	著 者	出版社
1	数学検定過去問題集 準2級	河野修大	創 育
2	大学1・2年生のためのすぐわかる物理	前田和貞	東京図書
2	計測工学	谷口 修、堀込泰雄	森北出版
4	大学編入試験問題数学／徹底演習	林 義実、山田敏清	森北出版
4	編入数学徹底研究	桜井基晴	聖文新社
4	宇宙兄弟 2, 3, 12	小山宙哉	講 談 社

(期間：2013年1～12月)

編集後記

今年度は図書館がリニューアルされ、この図書館報も賑やかなものにできました。館報の編集は、たくさんの方との共同作業です。僕は編集のまとめ役という立場上、しばしば、なしのつぶてを感じました。そして、多くの方の気持ちをくみ取る中で思ったのは、やはり人間には主観的なところがあるということです。急に好きになったり、嫌いになったり…勝手なものです。そんなときに図書館へ行って本を読んでもみると、色々な考え方があることに気づきます。それは、自分や相手を見つめなおすための、ひとつのチャンスになるのではないのでしょうか。

お忙しい中、原稿を書いてくださった先生方、館報の作成に尽力していただいた図書館職員の方々、図書委員の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

(電気電子工学科3年 神田 聖斗)